

東南アジアの銅鼓二例

宮川禎一

はじめに

筆者はこれまでこの『学叢』において二度、東南アジアの銅鼓に関する文章を掲載した。西盟型銅鼓（ヘーガー第Ⅲ型式）と麻江型銅鼓（ヘーガー第Ⅳ型式）の変遷過程に関するものである。^{〔1.2〕}

今回はこれまで筆者が日本国内で調査してきた複数の銅鼓のうち、それらの型式には含まれない二点の銅鼓の報告である。

それはヘーガー第Ⅰ型式の小型銅鼓（銅鼓A）と、銅鼓の最終型ともいえるインドネシア、アロール島付近に分布する「モコドラム」と呼ばれる特殊な銅鼓（銅鼓B）である。本稿ではその二個の銅鼓を観察し、その性格・位置づけについて記述したい。

まずは銅鼓Aからである。

一、小型銅鼓の一例（銅鼓A）

日本の弥生時代の銅鐸には本来のサイズより小さい、総高二〇cm

以下の小型の銅鐸が複数存在する。それらは小銅鐸、あるいは銅鐸形銅製品などと呼ばれ、本来の銅鐸とは意義や用法、分布的な面で区別して考えられている。

同様の現象は東南アジアの古代青銅器を代表する銅鼓においても見られることである。ここで紹介する銅鼓も一般的な銅鼓のサイズからは離れた「小型」である。このような小型の銅鼓の実例は少くはないのだが、これまで論じられることがあまりなかつた。そこで筆者の観察した小型銅鼓の具体例の紹介を中心に、その性質について考察を巡らせてみたい。

ここであつかう小型銅鼓は現在、島根県立古代出雲歴史博物館が所蔵するものであり、展示場に常時展示されている。しかし以前は高知市在住の個人コレクターが所有していたものであつた。筆者は十年余前に高知市でその実物にあたつて実測や写真撮影、拓本を取るなどの調査を行なつた。それからやや時は経たが、現在の所蔵者である古代出雲歴史博物館の許可を得て、ここにその調査の結果を報告することとした。

二、小型銅鼓の観察（図25、挿図1・2）

この小型銅鼓（銅鼓A）の計測と観察の結果は次のようなものである。

1 法量

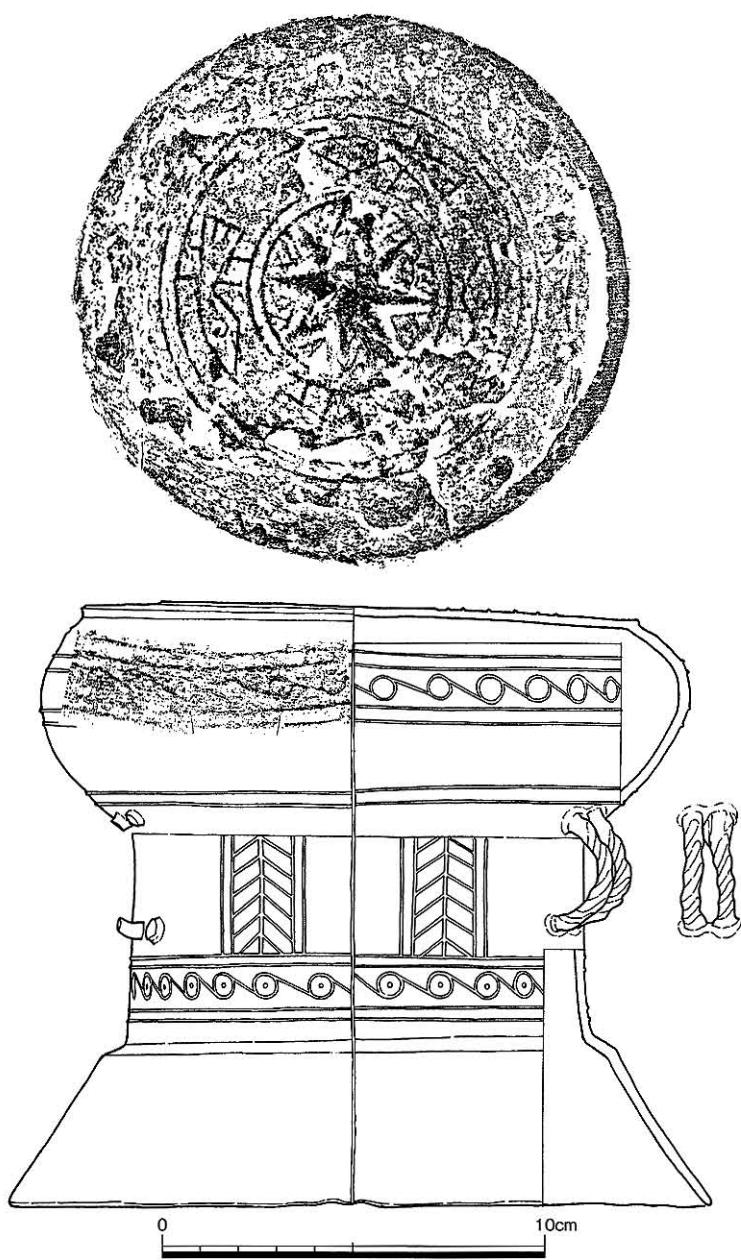
総高は一五・八cm。面径は一四・六cm。胴部最大径は一七・〇cm。腰部径は一一・七cm。脚部径は一八・四cm。重量は一九七〇グラム。

2 形状

大きさは小さいものの、その形状はヘーガー第I型式の典型である。胸部はやや上側で強い張りをもち、胴部はほぼ円筒形で長く、脚部は強く外方にひらく。胸部下部から胴部中位にかけて二本で二対の捩棒状の把手を左右四カ所に配する。把手には経年による欠落がある。

3 文様

鼓面の文様 中心部の太陽文は八光芒を配し、その芒間には斜線を入れた鋸歯文を入れている。その他には圓線を配し、四羽の飛鳥文を左回りに入れている。サイズが小さいためか飛鳥文の描線は他の銅鼓と比べれば非常に簡略である。また錫化が著しく、表面の剥落などもあって観察が難しい。



挿図1 小型銅鼓（銅鼓A）実測図 S=1/2

胴部の文様 胴部最大径の部分に二条線を二段に配し、その間に円点文を斜線で連結した連續円文を配している。

腰部の文様 腰部下半には胸部同様に二条線を二段に配し、その間に円点文を斜線で連結した連續円文を周回させている。さらにその文様帯から縦方向に四本の魚骨文が伸びて胸部下端に接している。

脚部および内面に文様はない。

4 錄造技法

青銅錄造によるもの。文様がすべて凸であるので、錄型は砂土製

合からして製品として丁寧に仕上げられたとはいえない。簡素な文様の状態とも合わせて、「鳴り物」としての銅鼓の機能を十分果たすのは難しかつたのではなかろうか。

三、小型銅鼓のこと

この小型銅鼓は日本国内では見ることが少ないとされているヘーガー第Ⅰ型式に属している。日本国内の博物館などに収蔵された銅鼓で比較的多いのは第Ⅲ型式（西盟型）と第Ⅳ型式（麻江型）である。従つてこの銅鼓は小型ではあっても、古式の銅鼓の研究には一定の意義を持つ遺物とすることが出来よう。

小型銅鼓はベトナム北部での出土例が多いとされている。ベトナムの首都ハノイの歴史博物館には多くの銅鼓が展示されている。筆者も近年ハノイを訪れて博物館に展示された多数の銅鼓を実見する機会を得た。その多くの銅鼓の中に紹介した小型銅鼓と近似する銅鼓も存在した。

ベトナムから出土あるいは伝來した銅鼓の大部分についてはトヨタ財団の助成によって『ベトナム銅鼓図録』という大部の図録が出版されており、その全貌を知ることができる。⁽³⁾

この図録の日本語解説には「小銅鼓の分類とその年代」という項目がある。左に引用してみよう。

「小銅鼓とは、大形・中形の銅鼓を模倣し、粗略な文様と粗雑な作りをした小形の銅鼓のことである。小銅鼓はタインホア省で初めて発見された。その後、パジョやヤンセによるトンソン遺跡の調査で多數検出されるようになつた。一九五四年のベトナム北部解放後、

造欠陥（湯廻りの不良）と思われる銅鼓の孔や側面の鋸歯状の具

本銅鼓については、旧所蔵者からタイなどの東南アジアで骨董商から購入したものであると聞いた。しかし正確な出土地や出土状況、伝来などに関する情報が無い。したがつて現在の保存状態がどのようない理由によるのかは推察である。現状では表面の錆化が進行しており、ながく土中にあつたもの（出土品）かと想像される。また鋸

5 保存状態



挿図2 小型銅鼓（銅鼓A）部分写真

ベトナム人研究者によるドンソン遺跡の調査やタインホア省チュウズオンの調査、ランヴァクの調査などが行われ、主に北部の高地や平野部の各省で発見されるようになつた。小銅鼓は規模・形態・製作技法に基づいて、三つに分類される。

I類

鼓面径・高さとも五cm程の小さなもので、形は歪み粗雑なもので、銅の塊のような感じを受ける。ほとんどの銅鼓に文様がなく、あるとしても文様帶の数が少なく、かなり粗雑なものである。大多数の銅鼓がドンソン遺跡と隣接する地区で発見されている。このタイプの銅鼓は五〇個知られ、小銅鼓全体の五三%を占めている。

II類 鼓面径が五～一五cmの中形の銅鼓である。このタイプは形態によって二つに細分される。I式は胴部が膨れ、腰部は広がり足部が短く、全体的に低い形態の銅鼓である。II式は腰部がまつすぐなタイプで、ほつそりと高い形態の銅鼓である。この違いは、模倣された大形・中形の銅鼓の形態に由来している。そして、このII類の小銅鼓には四個の耳（把手）、鼓面に一個の丸い突起物がある。文様はBグループ銅鼓の模倣で、鼓面には通常四～八光芒の太陽文がある。鼓面・身部には幾何学文帶があり、四羽の飛鳥文帶があることもある。また、この類には鼈蛙像や口を開けた犬像のように独特の文様をもつものや独特の形態をしたものも一部含まれている。このタイプの小銅鼓は四三個知られ、全体の四四%を占めている。

III類

鼓面径と高さが一五cm程である。このタイプの銅鼓は発見数が少なく、一九二五年にドンソンで発見された二口とベトナム歴史博物館がハソンビン省ソンタイン部落で発見した一口の銅鼓が知られているだけである。この三口のうち一口には腰部に鋸歯文と踊人文があり、他は八光芒の太陽文と四羽の飛鳥文、そして幾何学文帶

がある。

これらの小銅鼓の用途はドンソン遺跡などの墓跡から出土しているため、死者への副葬品が考えられるが、II類の鼓面に突起物をもち四個の耳をもつ小銅鼓については別の用途が考えられる。それは歴史博物館が一九八一年のランヴァク遺跡の調査で出土した資料の検討から、この小銅鼓は日常生活における小形の鳴物として使用された可能性がある。」

続いて小銅鼓の年代問題が記される。その要約は出土木棺墓のC14年代法による測定などから「最古の小銅鼓が前三世紀と考え、最新の小銅鼓に後一・二世紀頃の年代を与えた。つまり、この小銅鼓はB・C・Dのグループの銅鼓（筆者註 典型的なヘーガー第一型式の銅鼓群）と時を同じくしていたと考えられる。」と記している。

この文章が今回紹介した小型銅鼓に関するベトナム研究者の見解である。すなわち高二〇cm以下の小型銅鼓がその法量によつて三種に区分されること。最小のグループ（I類）はごく小さく、全く鳴物の意味を持たないこと。鼓面径が五～一五cmのII類は簡略な文様を持つもの。そしてIII類は面径・高さとも一五cmほどもので発見例が少ないもの、となつてゐる。

今回本稿で紹介した小型銅鼓はこのうちのIII類に分類されよう。

前記のように、ベトナム銅鼓図録二四四頁の「ソンタイン部落」の銅鼓（ベトナム歴史博物館展示）が面径一五・〇cm、高一五・〇cmなので法量的に銅鼓Aと近似する。文様はソンタイン鼓がやや整備されている。鼓面の飛鳥文は比較的丁寧である。銅鼓Aよりは若干古様を示すのであろう。

一般的な第Ⅰ型式の銅鼓が鼓面径四〇～五〇cm、総高も三〇～四〇cmほどのに対し、これら小型銅鼓（Ⅲ類）は明らかに小さい。しかしながら全く鳴り物としての使用が不可能かといえば難しいところである。一般的のサイズからは隔たっているが、完全なミニチュア（I類）の範疇にいれるのも困難である。

一般的な銅鼓は製作技術も高く、文様も精緻な物が多い。それと比べれば五cm程度のミニチュア銅鼓はあきらかに「銅鼓の形をした別物」であり、墓に副葬される明器のような意味があつたのだろう。

一方、銅鼓Aなどは面径・器高が一五cm程度と小さいながらも、文様は一般的な大型の銅鼓の文様構成を守っている。しかし本例は鋳造時のバリを残したままである点など、やや粗雑な傾向が見られる。銅鼓製作の本流からはすこしはずれたものと推測される。またこの大きさに一定の意味があつて製作されたのであろう。

報告した小型銅鼓の意義はこのようなものである。

小型銅鼓の類品としては千葉県の国立歴史民俗博物館が所有するタイ国出土の小型銅鼓があげられる。鼓面の文様は銅鼓Aよりやや複雑である。面径一一・〇cm、高八・〇cm。銅鼓Aよりは一段と小ぶりである。

四、モコドラムの一例（銅鼓B）

本例もまた高知県の個人が所有していたものであるが、調査後に手放されたらしく、現在の所有者は不明である。写真は掲載できないうが、実測図（鉛筆描き）を掲げてその実体を紹介したい。

「モコ」はインドネシア東部、小スンダ列島の東端に位置するア

ロール島で使われる銅鼓を示す言葉である。この島では二十一世紀の現在もなお現地の人々によつてその銅鼓を中心とした祭祀や意味ある交換が行われていることで知られている。二千年前のインドシナ半島北部で発達した銅鼓が現在もなお、意味をもつて使用されているとは驚くべきことである。もちろん形は古代のものからは変形しているが、その形状や文様の中には、古い銅鼓の「文法」が保持されていることも分かる。

このタイプの銅鼓、モコドラムは日本国内においてもいくつか収蔵されている。大阪府の国立民族学博物館などに複数収蔵されている。しかしながら実測図をあげて報告された例はないようなので、ここで研究の基礎とするべくその具体的な構造・形状を報告することとした。

五、モコドラムの観察（插図3）

全体は細長くみえるが、鼓面・胴部・腰部・脚部からなる銅鼓の基本型をとつてている。

1 法量

総高四八・四cm。鼓面径は二八・二cm。脚部径は二四・八cm。器壁の厚さは約二mm。重量は七六五五グラムである。

2 形状

総高に対し面径や脚径の小さい形、すなわち細長い形状を取つてゐる。鼓面は薄く、中央にかけてやや窪む。その周縁は胴部より張り出している。胴部はあまり張りをもたず緩やかな鉢状を呈している。胴部下端の四方には縦方向の帯状把手が配置されている。腰

部は全体でいちばんくびれた部分である。その長さは上側の胴部や下側の脚部に比べれば短い。おおざつぱには二・一・二の割合である。腰部は円柱というよりはやや下に向いて広がる形をとっている。脚部はほぼ直線的に外方へ開く形をとっている。

3 文様

文様はすべて凸である。凸線による幾何学的な文様が見られる。

鼓面の文様 鼓面はその中心にも文様を持たないが、周縁には

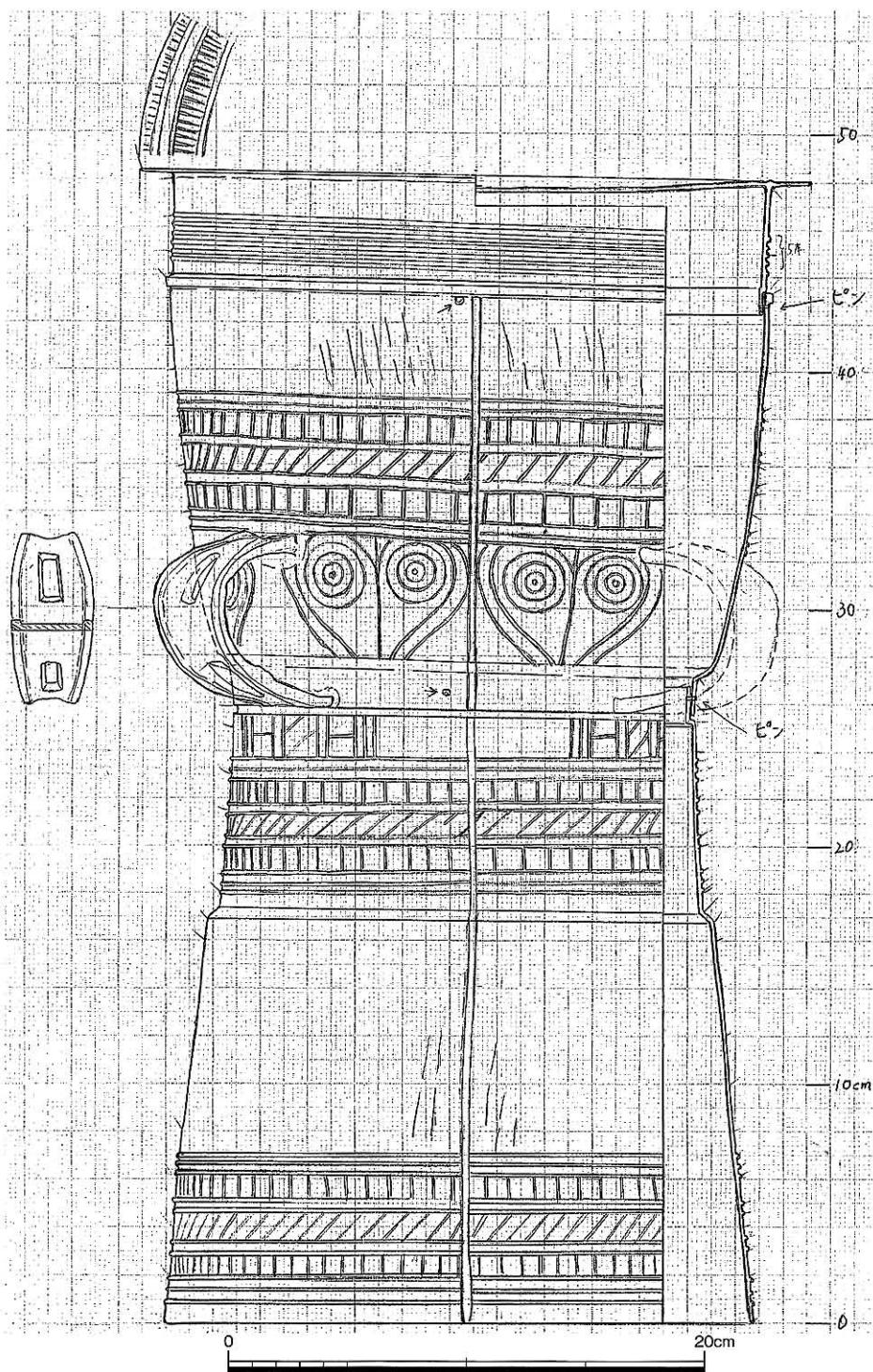
二条の圈線をはさんで、櫛歯状の細い線が鋲出されている。

胴部の文様 鼓面直下に五条の細い突線が巡る。空白部を置いて胴部中位には三段の格子状文様帯が巡る。上下段は正方形の格子だが、中段は斜め格子である。この文様帯パターンは腰部、脚部でも繰り返される。胴部下端には心葉形の条線の内側に二個の同心円文を配置した特徴的な文様が配されている。

腰部の文様

腰部の中位から下部にかけては三段の格子状文様帯

が巡っている。しかし注意すべきは腰部上部には縦方向の格子状文様帯が配されていることである。その特徴は古い銅鼓、前記の小型銅鼓にも見られた文様配置である。このモコドラムがその時代的新しさの中にも伝統的な文様配置を守っていることを良く示す部分である。



挿図3 モコドラム(銅鼓B)実測図 S=1/3

脚部の文様 脚部の上半には文様はない。下部に条線(三・一・一・一・

三) の間に格子状文様帯が見られる。

銅鼓の内面に文様などはない。

4 鋳造・製作技法

全体は黒褐色を呈している。他のモコドラムの成分の分析例によれば銅(Cu)五十二%、亜鉛(Zn)四十三%、鉛(Pb)五%という結果がでたものがある。⁽⁴⁾したがってこれも青銅といふよりは真鍮製(黄銅)である可能性を念頭に置くべきであろう。モコドラム全体、写真などでは破損したものが見られない。一般的なヘーガー第I型式の銅鼓では青銅製、すなわち硬いため、破損や欠損があるものが多々見られる。モコドラムが破損が少ないのは、その材料成分(真鍮)に依つている可能性が考えられよう。

観察したこのモコドラムの鋳造上の特徴は、全体が一铸の製品ではないことである。すなわち鼓面を含む胴部の上四分の一の部分、胴部中位から胴部下端の部分、そして腰部から脚部にかけての三部分が別々に製造されていた。そしてそれらを各四箇所、ピンで留めて成形している(鉢留)。通常の型式の銅鼓では見られない成形方法である。たしかにこのような形状と薄さの銅鼓をたつた一回の鋳造で成形することには困難が伴うだろう。三分割で成形し、のちに組み立てるほうが合理的だとみられる。分割鋳造後に合体成形という方法は他のモコドラムでも見られる。

鼓面部・胴部・腰部・脚部の三部分のうち、下の胴部と腰部・脚部については、鋳造した際の鋳型の合わせ目が正面と背面に二本、縦方向に入っていることから、砂土製の分割鋳型と推定される。外面二個と内面(中子)一個である。四つの把手は別鋳造され、外型

に埋設されていたのである。

出来栄えに破綻や遗漏も少なく、製作技術はかなり高いといえる。

全体に錆や腐食、欠損などはなく保存状態は良好である。出土品ではなく伝世資料とみられる。あるいは製作年代が現在に近いのかも知れない。

六、モコドラム(銅鼓B)の位置づけ

モコドラムに関する研究は乏しい。また全貌を考えるには手元の資料も少ないが、今後の研究のために情報を整理しておきたい。

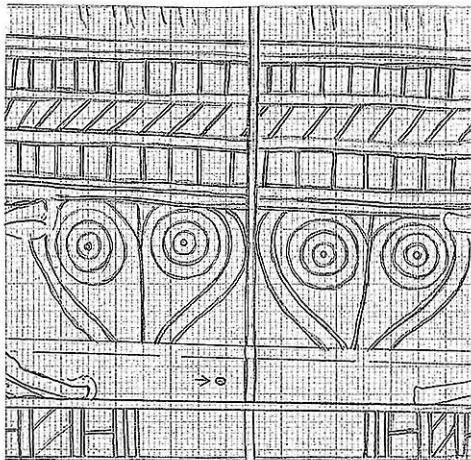
写真で見ることができるのは『世界考古学大系8 南アジア』⁽⁵⁾の図版一三五の「銅鼓」である。ジャカルタ博物館収蔵品で、「青銅

高六一・八cm。インドネシア アロル島 青銅器時代 ドンソン文化」と記載されているものである。大きさが銅鼓Bよりもひとまわり大きいが基本的なスタイルは近い。銅鼓側面の文様も銅鼓Bに近時している。把手が透しの多いものである点が異なる。また鼓面に複雑な波頭状の文様が施されている点が銅鼓Bとは異なっている。「青銅器時代 ドンソン文化」と記述するのも問題があるよう考える。もちろん古代ドンソン文化の影響を引く物ではあるのだが、現在なおアロール島において使用されている型式であることからみて、これらのモコドラムはせいぜい十七~二十世紀頃の製品ではなかろうか。インドネシア各地からは明らかにヘーガー第I型式の正統な銅鼓も出土している。⁽⁶⁾その共通性は文様配置の文法を守ることや側面型の基本型を守るところではあるが、一方その隔たりもまた大きいのである。

紀元前後頃からの形状や文様の類似部分はあるのだが、生産と使用とが二千年前から連続したものではないのではないかと考えられる。銅鼓生産は一時期途絶え、後世となつて伝世品あるいは出土品の第Ⅰ型式銅鼓をもとに新たに模造された流派である可能性が考えられるのである。

さらにこの銅鼓Bと「ペジエンの月」との関係も興味深い問題である。東南アジア銅鼓の中で、現存する最大の銅鼓はインドネシア共和国、バリ島中部のプナタラン・サシ寺院にある通称「ペジエンの月」と呼ばれる銅鼓である。面径一六〇cm、全高一八六cmとされる。この銅鼓は非常に大きいのだが、その外見的形状はモコドラムと共通する。⁽²⁾この「ペジエンの月」の最大の特徴は胴部に鋳出された精緻な「人面文」であろう。この人面文と銅鼓Bのハート型の文様を比べれば何らかの関係があることは明白だ（挿図4）。その先後関係は二通り考えられるが、筆者は銅鼓Bに見られるようなハート形の幾何学文様がある段階で「人の顔」という意味を持つた、と考えている。幾何学的文様から具象的文様へという時間的順序である。その逆は考えにくいのではなかろうか。漠然とした表現だが「ペジエンの月」も、さほど古くはない銅鼓ではなかろうか。

写真などで見るモコドラムの多くは、直線的形状の銅鼓Bとは異なり、胴部と脚部に膨らみをもち（「ペジエンの月」も同様）、その表面に具象的な文様を鋳出したものである。文様は同じ物の繰り返しであり、鋳型（外型）にスタンプで施されているようだ。また上下の合わせ目が腰部の真ん中あたりにあるものが普通である。それは銅鼓Bの合わせ目の位置とは異なる。そのような装飾性豊かなモコドラムは「比較的新しいもの」と考えて良さそうである。それらに比べると、ここで紹介した銅鼓Bはモコドラムの中でも古様を呈しているのであろう。



挿図4 「ペジエンの月」の人面文（左）と銅鼓Bの胴部文様
(世界考古学大系8より)

銅鼓Aはドンソン文化期のベトナム北部（あるいはインドシナ半島北部）の出土品と推定される。一方の銅鼓Bはインドネシア、スンダ列島東部のアロール島かその周辺の伝世銅鼓（モコドラム）である。両者は時間的にも地理的にも隔たりが非常に大きい。しかしながら、その腰部に施された文様を比較すれば、共通する部分も多いことが理解されよう。広い意味での「銅鼓の文法」に従っているのだ。しかし残念ながらその関係性の実態はまだ今後の研究に委ね

おわりに

かれているのである。

〈註〉

- 1 宮川禎一「施文技術からみた西盟型銅鼓の新古」『学叢』第一二一号
京都国立博物館 一〇〇〇年
- 2 宮川禎一「麻江型銅鼓の源流と展開」『学叢』第一二三号
京都国立博物館 二〇〇一年
- 3 ベトナム考古研究所・ベトナム社会科学委員会国際協力部編『ベトナム銅鼓図録』日本語版（日本語版監修 量博満・金子えりか）六興出版 一九九〇年
- 4 A·J·BERNET KEMPERS 『THE KETTLEDRUMS OF SOUTHEAST ASIA』 1988 Netherlands
- 5 長広敏雄「インドネシアの先史文化」『世界考古学大系8南アジア』平凡社 一九六一年
- 6 坂井隆「群島部（マレー語世界）の考古学」『世界の考古学⑧東南アジアの考古学』同成社 一九九八年
- 7 註4文献のプレート3. 01参照